後1週目の発現菌はグラム陽性球菌が多く，MRSA 3例，CNS 2例を中心とする11例（12%）であった．術後3週目の発現菌も11例であったが，やはりグラム陽性球菌が多かった．臨床検査値の異常および自覚的副作用は8例にみられたが，いずれも軽度であった．

12) IPM/CS および AMK が，有効であった M. chelonae subsp. abscessus による肺感染症

川島　崇・来生　哲（国立高田病院内科）

症例は，53歳，女性．高血圧・パーキンソン病等にて加療中であったが，結核の既往はなかった．平成3年12月より，夜間の咳嗽が続き，平成4年2月18日に，近医を受診し，検痰で，Gaffky 2号を指摘され，当院に紹介入院した．喀痰より，M. chelonae subsp. abscessus のみが分離され，胸部レ線では，両肺野に，浸潤影を認めた．抗結核薬全てに感受性無く，ディスク法により感受性のある AMK，IPM/CS の使用により，症状，胸部レ線像が改善し，排菌もみられなくなった．

M. chelonae subsp. abscessus による肺感染症は，稀であり，抗結核薬はすべて無効とされ，治療薬はないと云われている．しかし，今回の症例は，抗結核薬以外の抗生剤に感受性がみられたため使用して，有効であった．

13) 菌血症の予後について

和田　光一・瀬賀　弘行（新潟大学医学部内科学第二教室）
荒川　正昭

1976～1990年に当科で経験したのべ208例の菌血症の予後を検討した．

総計では，144例（69.2%）が除菌され，64例が死亡した．基礎疾患別では，白血病では除菌31例（57.4%），他の血液疾患では除菌13例（61.9%），悪性腫瘍では除菌10例（52.6%），SLE，MCTD では除菌18例（78.3%）であった．肺炎合併例は，除菌35例（49.3%）で，有意に予後不良であった．主な起炎菌別では，MSSA で除菌24例（96%），MRSA で除菌11例（52.4%），腸内細菌属で除菌39例（84.8%），P. aeruginosa で除菌13例（46.4%）であった．死亡例における生存日数を検討すると，平均5.1±8.3日であり，3日以内の死亡が40例（62.5%）であった．

この結果より，菌血症では血液培養判明前の empiric therapy における抗菌剤選択が最も重要であると考えられる．

II. 特　別　講　演

「院内感染とその対策」

岩手医科大学医学部細菌学教授
川　名　林　治　先生